

# 就職活動を振り返ることによる就労意識の変化について

—学生による就活本作成を通じて—

吉田 智美  
愛知学泉短期大学

## About a change in a job consciousness by looking back to job-hunting - Through the job-hunting book making by the student -

Tomomi Yoshida

キーワード：就職活動 job-hunting、就労意識 job consciousness、キャリア教育 career education  
キャリアデザイン career design

### 1. はじめに

1990 年以降若年者の雇用問題を発端とし、2011 年文部科学省は大学設置基準の改正により、大学・短期大学の教育課程での職業指導（キャリアガイダンス）を盛り込むことを義務化した。それに従い高等教育機関においては、キャリア教育を含む初年度教育の充実が図られるようになった。Erikson (1957) は、学生が社会に出る前の大きな試練となる就職活動について、「若者にとっての職業選択は青年期の重要な課題の一つであり、アイデンティティ形成の最も重要な側面である」とし、人生において重要な出来事の 1 つとして位置づけをした。

就職に対する学生意識の研究は、多々見られる。入学時の動機に着目し、就職・進路意識に関する研究（浅岡・五十嵐 2004）や、就職問題を背景に学生の意識調査の研究（高橋・石井 2008）などが多く行われている。さらに、就職活動体験記の成功体験や失敗体験における言語分析の研究もなされている（豊田他 2013）。

しかし、意識調査から具体的な教育方法に移すこととなると、研究は発展途上といえる。

以上のことから本研究では就職活動後、学生が就職活動を振り返る手段として、自分たちの活動をもとに就職活動本の作成を行い、それによる自己評価と作成前後の就労に対する意識変化についての検証を行う。

### 2. 就職活動本の作成について

人生の岐路ともいうべき就職活動を終えて安堵とともに、漠然とした不安に陥ることは研究において明らかにした（吉田 2010）。不安の中であっても、多くの学生は就職活動の振り返りをせずに、次のステップ（社会人）へ進んでいるのが現状である。そこで、その状況を立ち止まり、自分たちが行った就職活動で努力、苦労したことの再認識を行いながら、後輩へ伝えるために本の作成を行った。さらに、本を作成後に変化するであろう就労への意識変化の検証を目的とした。

作成した短期大学生は、1 年時には「働くこと」や「キャリアの考え方」「自己分析」「履歴書作成」などの授業を受講した。高校卒業直後であり実感を持たず、数か月後には就職活動を行うのが短大生の状況である。言い換えれば、先輩の様子や就職活動の状況をゆっくり見たり、理解する期間も短い状態で、就職活動が始まっている。

今回の本の作成は、就職活動をどのように対応したらよいのかを学生目線で確認することが有効と考え、後輩への就職活動の道標として利用してもらえよう、自らの就職活動について本にまとめた。

#### (1) 作成について

##### 1) 作成者

総合ゼミナール所属の 11 名とゼミ担当教員 1 名

##### 2) 作成時期

2016年10月～2017年1月の8～15回計8コマ  
3) 事前準備

就職活動本の作成をする前に、事前に就労に対する意識についてレポートを課した。

また、作成する下準備として、自分たちが行ってきた就職活動の流れを一通り書き出してくることを課題とした。

## (2) 作成手順

作成手順は、8回分の流れを最初に教員が示した。その後、担当者が簡単な計画書を教員に提出し、変更する場合も、再度計画書を提出するようになった。

### 1) 作成内容・分担

自分達の就職活動の流れを基に内容決定を行い、2～3人一組のグループで担当部分の作成することにした。人数の限りがあるので、複数の項目を担当することとした。

目次1～8までは一般的な就職活動の流れ、目次9～11まではオリジナルの内容である(表1)。就職活動前を思い出し、不安や疑問について意見を出し合い、構成を行った。さらに、作成中に内容の変化・追加など柔軟に対応することも共通見解とした。

表1 就職活動本の目次

1 自己分析・業界・企業研究
2 合同説明会
3 履歴書
4 エントリーシート
5 筆記試験
6 グループディスカッション
7 面接
8 内定をもらうまで
9 就職活動にかかるお金
10 就職活動のQandA
11 自分に向いている職種を考えよう

### 2) 作成にあたって

教員からの注意事項は、以下の4点とした。

- ①計画書に従って期限は守ること
- ②変更する場合は相談すること
- ③あやふやな部分は調べること
- ④引用した場合は引用元を入れること

チームで働く力(チームワーク)を特に意識し、お

互いに担当する部分の読み合わせ(中間発表)では意見を出し合い、パソコンが苦手な学生のサポートなど、全員で作成する意識を高めた。

また、仕事をする上で求められる「報・連・相」を意識させるため、報告することで得られる共通見解、連絡内容をまとめて伝えることの重要性、相談することで得られる安心感なども、授業内で説明しながら、重要性を認識させるよう心がけた。

単なる作成だけでなく、「教育の職業的意義とは、あくまで仕事の世界に対する基礎的で初歩的な準備を与えることである。実際に仕事に就いてからさらに知識やスキルを伸ばしたり、更新したり、転換することはむしろ望ましいことである。しかし、初発の素地が何もないところでは、そうした事後的な発展すら生じにくい。職業的意義をもつ教育とは、個人が仕事の世界に参入する際の最初のとっかかりを与えることなのである」(本田2009)<sup>1)</sup>と述べているように、卒業後の仕事の様子をイメージし、さらにチームワークの重要性を理解してもらえよう進めた。

## 3. 就職活動本の作成

### (1) 作成の流れ

グループごとに進め、ゼミナールの最初にそれぞれの進捗状況を簡単に報告した。(表2)

表2 就職活動本作成の流れ

回数	内容
1	就職活動本の項目、担当の決定
2	担当部分の内容を全員に発表 内容の構成を考える アンケートの作成
3	アンケート集計 見やすいレイアウトを考えて作成(下書き)
4	1回目締め切り: 中間報告、字体・フォント・レイアウトなどの統一(題名・数字)
5	訂正・加筆作業
6	2回目締め切り: 中間報告
7	3回目締め切り: ページを入れる
8	完成、就職活動本作成の最終レポート

### (2) 内容

1～8回目までの授業は、以下のとおり行った。

途中、就職活動などで休みもあり、授業外でも対応を行った。

1) 1回目：就職活動本項目、担当の決定

事前準備から、項目・担当者決定をし、グループで計画書を作成し、教員に提出させた。以下の3点を確認した。

- ①締め切りを守ること
- ②疑問点はグループ内で共有し解決を図るようにするか、教員に質問すること
- ③グループ内で解決できないことは、ほかのメンバーに伝えること

一人で背負うのではなく、グループで作成することを認識させた。

2) 2回目：内容の発表、構成・アンケート作成

就職活動を行っていない1年生が現在どのようなことに不安を持っているのか、現就活生の説明会参加回数、就職活動中のアルバイト、就職活動にかかったお金に関してアンケート作成を行った。回答に隔たりがないように、事前にゼミ内でアンケートを行い、作成の中立性と回答をしやすい質問の仕方などの言葉の使い方を探し、その結果をどのように活かしていくのかを確認した。次週までに休み時間を使い、1年生にアンケート回答をお願いすることにした。

さらに、「どのような仕事に向いているかわからなかった、今でも迷っている」という現就職活動生の声により、職種を選択に使ってもらえるような、簡単なフローチャート作成を行った(図1)。学科の学生がどのような職種に多く就いているかを、学生が就職課で尋ね、それらに当てはまるよう作成した。ゼミ生以外にもやってもらい、合致性があるかの確認作業など、次週までに行うことを確認した。

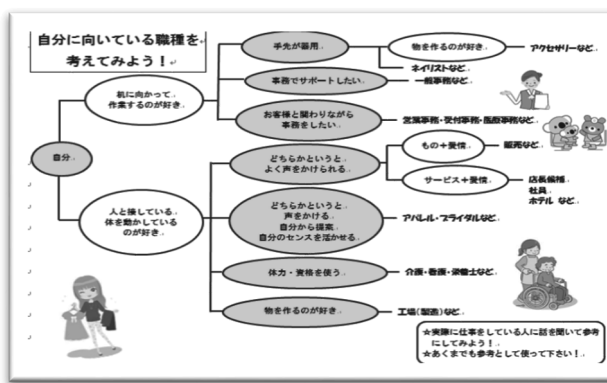


図1 職種決定のフローチャート

3) 3回目：アンケート集計、レイアウト構成

前回のアンケートを集計した。さらに一側面だけの回答だけでなく、複数名で集計結果の正当性の確認を行った。

この頃になると、グループでの進捗状況に差が出てきたが、教員と担当者で話し合い、今後の流れを再確認し、改めて計画書を作成した。今までのレポート作成とは違い、自己満足ではいけないこと、グループワークで締め切りがあること、作成者以外が理解をする事の重要性を認識しながら、どのような内容や文章が読みやすいのか、自分たちの作成した内容について確認した。

学生からの意見は以下のとおりであった。

- ・字が大きい方が読みやすい
- ・あまり長い文章は読みたくなくなる(短いほうが理解しやすい)
- ・硬い表現は息苦しいし、自分たちらしくない
- ・絵(余白)は適度にあったほうが見やすい
- ・色を使ったほうがきれい

4) 4回目：中間報告、字体・フォント・レイアウトの統一

担当部分の中間報告を行った。前回の話し合いを元に、題名の文字やフォント、字体など共通で使うものを統一させた。

また、一部引用した箇所があるにも関わらず、その引用元が抜けている部分があったため、その記載について、再度注意を促した。

5) 5回目：訂正・加筆作業

訂正・加筆箇所、進捗状況の確認などを行った。

6) 6回目：中間報告

担当分作成がほぼ終わったグループには、表紙(図2)・目次の作成を依頼、パソコンでの入力が苦手な学生には、得意な学生が横につき、手伝いを行った。中間報告を行い、訂正内容・他項目の見習うべき内容の確認など意見を伝えあった。

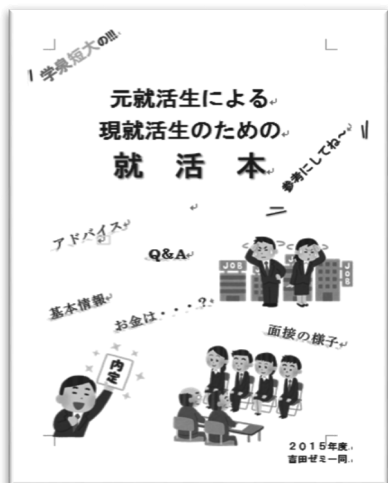


図2 表紙

7) 7回目：締め切り、まとめてページを入れる

3回目の締め切りとし、各グループで1冊の本にし、内容が重なっている部分がないか、誤字・脱字のチェックを行った。

書類作成に見立て、どのような書類を作成する人が信頼されるかなど、仕事を意識させながら行った。

8) 8回目：完成、最終レポート

最終チェックを終え、完成させた。完成後は、就職課へ置いてもらうことをお願いする係、広報に宣伝してもらうためのお願いする係、教員に配る係など、本を上手く活かしていくためには、どのような働きかけが必要か考え、担当を再び決め行った。

最後に、作成中どのような意識で作成していたのか、仕事をする、働くことに対してどのように感じているのかをレポート作成を行った。

以上が8回の大まかな流れである。

(3) 学生の自由記述から

完成後の学生レポート内の自由記述から考察を行った。

1) 作成中の意識として

就職活動本作成中の意識の自由記述から大きく以下の4点にまとめた。

①後輩や相手のために作成することの重要性

- ・後輩の子たちに参考してもらえたらいいなと思った。
- ・最初は自分が経験したことを、ただ淡々と書いているだけだったが、どのようにしたら相手を読みやすいか、見やすいかなど相手の気持ちになって制作するようになった。

②力を合わせ作り上げることの重要性

- ・みんなの力を合わせたら、想像以上のものができて、作っていく中で本当に1年生のことを考えながら試行錯誤して取り組むことができたし、遠慮なく意見を出し合うみんなを見て作り上げることの大切さがわかった。
- ・構成などは初めは思い思いにやっていた、バラバラだったものが、話し合いをしていく中で統一されてみんなであつた一つのことをしている感じが楽しかった。

③自分の自信・勉強になったこと

- ・自分が作ったページが褒められて、自信になった。
- ・就活のことを振り返っていくと、その時には気づかなかった自分のことを発見することができて、内定をもらうことができたと思う。

④友人たちが努力していることの認識

- ・自分たちが経験したことがあてになるのかと心配になったが、作ってみるとみんなもいろいろな経験をしていることが分かった。
- ・就職活動と一概に言っても、一人ひとり行っていることが全く違うことを学びました。自分がすすみたい職種によるけれど、(履歴書のために)字を書く練習をする人、自分の性格について改めて振り返っている人など、様々な努力をしていることが分かりました。

①～③は、事前に作成の意義などが学生の中にしつかりと位置づけられていた事がうかがえた。

④では、就職活動中、周囲の様子などを意識する余裕がなかったとのことだが、友人たちの努力などを聞き、就職活動を乗り越えたことへの同士としての連帯感が生まれた様子であった。最近では SNS などで、活動中の情報交換が頻繁に行われているであろうという認識であったが、就職活動中の学生同士のつながりは比較的薄く、個々で就職活動を行い、情報交換が思いのほか少ないことがうかがえた。

2) 仕事・働くことに対して

さらに、作成後の仕事・働くことへの気持ちの変化も4点にまとめることができた。

①やりがいを持つこと

- ・前までは、大人になったら卒業して働かなければいけないというイメージが大きかった。今はせっかく選んでもらったのだから、やりがいを持って働きたいという気持ちに変わった。

②責任感を持つこと

- ・自分のパートをやりきったことで責任感が持てた、仕事に対しても責任感が必要だと思う。
- ・次の週まで完成させなければいけなかったり、提出しな

いといけないので、みんなに迷惑をかけないようにした。仕事でもこんな感じだろうから、きちんと責任をもってしないといけないと思うようになった。

### ③誰かのため・相手のために行うこと

・冊子を作り、相手の気持ちになって考えられるようになりました。初めは決められた課題をこなすことばかり考えていましたが、これを知らない誰かが見たとき、理解してもらえるのかと思い、相手が気持ちよく読めるように工夫するようになりました。

・誰かのため何かをすることは今後の生活でも必要だと思う。

### ④前向きに努力することの大切さ

・苦労した就活の時期をもう一度振り返ることで、その努力を無駄にしたくないという気持ちがさらに強くなった。  
・4月からの自分をイメージしながら、「よし頑張ろう」と前向きになった。

・就職活動本の作成で最初はだめだったけど、一生懸命やっって変わったから、仕事も同じでできなくても、努力したらいいと思うようになった。

就職活動本を作成する前は、内定者8名であったが、作成後は全員内定をもらった。作成中に、面接の意義、面接質問の意図の理解が促されたとのことである。

大学の授業を、職業的意義について考える場とするならば、就職活動本の作成は、①～④での学生の感想から見ると有効であると思われる。しかしながら、長期的視点で見ると、仲間で作業しているため助けを求めることに関して簡単にできてしまった感が否めない。さらに、チームワークや仕事の意義に関して学んでいくために、インターンシップなどの学外の授業との併用することによって、さらに効果が上がると考える。

## 4. 活動本作成前後の仕事に対する意識変化

就職活動本作成前後に、就労に対する意識の変化についての自由記述から、不安なこと、楽しみなことに分け、分析を行った。

### (1) 作成前後の仕事をするについての不安

〈作成前〉

- ・時間管理ができるか
- ・仕事をする能力があるか、できるか
- ・人間関係がうまく築けるか
- ・漠然とした不安

〈作成後〉

・仕事内容についていけるか、能力があるか

・一人暮らし、通勤、クレーム対応、休みがとれるのかの不安

・人間関係がうまく築けるか

どちらも、新しい環境に入っていく中で、人間関係などの不安に変化はなかった。しかし、作成前は漠然とした不安が多くを占めており、仕事をする事・未知の世界への不安があるように感じた。作成後は、具体的な事柄による不安に変化していた。

### (2) 作成前後の仕事をするについての楽しみ

〈作成前〉

- ・新しい人間関係ができる
- ・好きな仕事ができる
- ・お金がもらえる

〈作成後〉

- ・新しいことへの挑戦ができる
- ・新しい人間関係ができる
- ・お金がもらえる
- ・親に恩返しができる
- ・仕事内容が楽しみ

人間関係に不安を持ちながらも、新しい出会いを楽しみにしているのは、興味深いことである。楽しみはあまり変化がないが、仕事をする事への期待が増えていることは、仕事の概要が見えてきたことでの期待を感じていると思われる。

### (3) 考察

記述を分析する中で、就職本の作成前には仕事に対して、「不安」や「戸惑い」「怖い」などの言葉が多くあったが、作成後は「やりがい」や「続ける」「喜ぶ」「助け合い」の言葉が出てくるようになっていた。振り返りを行いながら就職活動本作成の効果があるものと考えられる。

就職活動の振り返りに関しては、就職活動本の作成は、1つの案に過ぎない。仕事の世界に参入する準備としての教育の中身として、本田(2009)<sup>2)</sup>は、「第一に働くものすべてが身に着けておくべき、労働に関する基本的な知識、第二に個々の職業分野に即した知識やスキルである」と述べている。さらに、吉田(2010)<sup>3)</sup>は、「キャリア教育のまとめとして、女性を取り巻く社会状況の変化、男女雇用機会均等法や労働市場の変化、さらに生活していくうえで必要なお金にまつわることなど、当たり前のことである

が最低限の社会への本田のいう「抵抗」を身に付けて社会へ送り出すような準備が必要である」と考えた。

キャリア教育の Super,D.E(1980)はキャリアとは、役割の組み合わせとし、梅沢(2007)<sup>4)</sup>は「もともと生き方と働き方をセットして捉えるという発想」をもとに、キャリアデザインとキャリア教育の流れを以下にまとめた(図3)

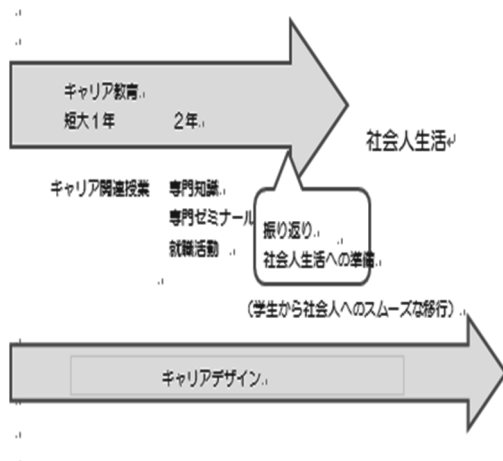


図3 キャリアデザインとキャリア教育の流れ

就職活動本の作成は、就職活動の振り返りのために始めたが、作成する中で就労の意識変化から、「自分の意見を伝えること」「お客様への掲示などには分かり易さを第一にすること」「報・連・相の意味がよく分かった」など仕事をしていくうえでの基礎的なスキルを学ぶことができたことが明らかになった。それらは、職業生活へのスムーズな移行への一側面になるのではないだろうか考える。

## 5. 終わりに

本を作成するにあたり、チームで働く力(チームワーク)を意識した。それは、経済産業省の社会人基礎力にも必要な力として挙げられている。しかし、石田(2015)<sup>5)</sup>の指摘でもあるように、「〇〇力をつけなければならない」というプレッシャーを日々感じつつも、それらの「〇〇力」が何なのか漠然としており、具体的に学生の間に何を努力してよいか把握できていない」というように、前もっての「〇〇力」ではなく、学生自ら行っている仕事、内容の意味を理解し、個人としての役割、グループの中での役割、さらに作成したものがどのように使われてい

くのかという見通し、それらを試行錯誤しながら自らの考えで導き出していくような力が、提唱している力と後々重なっていくことによって身につくことと考える。

特に短期大学では2年間という大変短い時間に、専門教育の習得、就職活動が行われる。したがって、社会人生活の土台づくりの場としてのキャリアデザインが手薄なものになってしまうことは否めない。短大生活を職業生活への移行としての2年間と捉え、仕事をする意識を常に念頭に置きながらの教育内容が重要であると考ええる。

就職活動は年々変化するため、毎年変更を加えながら、この活動本の後輩への教育的意義を今後検討していきたい。

## 引用文献

- 1) 本田由紀：『教育の職業的意義 - 若者、学校、社会をつなぐ』、ちくま新書、11(2009)
- 2) 同上：15
- 3) 吉田智美：キャリア教育の連続性に関する研究—女子大生の働くことの意識変化を中心として—、椋山女学園大学大学院人間関係研究科修士論文、127、(2010)
- 4) 梅沢正：『大学におけるキャリア教育のこれから』、学文社、16(2007)
- 5) 石田千晃：キャリア支援科目におけるアクティブラーニングの実践報告：課題設定路通じたコンテキスト可視化の試み、お茶の水女子大学紀要、2(2015)

## 参考文献

- 浅岡章一・五十嵐敦：交友活動への積極的関与が入学直後の大学生の精神的健康にはたす役割について、進路指導研究第22巻、(2004)
- 高橋桂子・石井藍子：大学生活・就職活動が自己効力に与える影響、新潟大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第7号、(2006)
- 豊田雄彦他：「就職活動体験記」主題の経年変化の分析、自由が丘産能短期大学紀要46、(2013)
- 吉田智美：キャリア教育の連続性に関する研究—女子大生の働くことの意識変化を中心として—、椋山女学園大学大学院人間関係研究科修士論文(2010)